平成22年5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

武蔵御嶽神社及び御師家古文書学術調査報告書（Ⅰ）～（Ⅳ）

— 金井家文書 —

武蔵御嶽神社の創建は崇神天皇（紀元前91）と伝えられ、社伝によると聖武天皇の天平8年（736）に僧行基が関東鎮護の為、社殿を造営し吉野金峰山より蔵王権現の分霊を勧請し安置したと伝えられていることから、御嶽蔵王権現と呼ばれていました。

古くから関東屈指の山岳信仰の古社であり、中世以前より豪族の庇護を受け、江戸に徳川氏が入国すると、家康・5代将軍綱吉の時には、社殿・堂舎の造営と大規模な修復が行われており、又、御朱印地として30石を与えられています。

御嶽神社は江戸城鎮護を祈願し、武運や豊穰の加護を祈念する霊場として、武士や庶民の信仰が関東一円からその他の地域に拡大していくと共に、江戸中期から明治期にかけては庶民による多くの講中が結成されていきました。

この御嶽神社と信仰を支えていったのが神主（大宮司）・社僧世尊寺と30余名の御師家でした。天明8年（1788）世尊寺が廃寺になった為、神主と御師集団の下に運営されていきました。

御嶽蔵王権現は明治7年（1874）に社号を御嶽神社と改称し、神奈川県社・東京府社となったが、昭和27年に新たに宗教法人・武蔵御嶽神社に改めました。

平成7年（1995）10月から多摩地域の山岳宗教を研究テーマに調査活動を重ねてきた法政大学多摩地域社会研究センターと青梅市教育委員会が共同し、神主だった金井家と御師家の理解と協力により、大切に保管・継承してきた古文書の学術調査がなされ、47,000点以上の古文書が確認されました。そして、2001年3月に武蔵御嶽神社及び御師家古文書学術調査（Ⅰ）として、1万点にもおよぶ金井家文書目録（博物館にて3,000円で販売中）が刊行されました。

目録はⅠ幕府支配・近代社会 Ⅱ社領 Ⅲ神社 Ⅳ家 Ⅴ書籍・絵図類の大きく5項目に分類されています。さらにⅠ幕府支配・近代社会は3の小項目、Ⅱ社領は9の小項目、Ⅲ神社は14の小項目、Ⅳ家は9の小項目、Ⅴ書籍・絵図類は4の小項目に分かれており、内容が分かりやすく収録されています。

2004年3月に報告書（Ⅱ）として武州御嶽山文書第一巻 —金井家文書（1）—（博物館にて2,500円で販売中）が刊行されました。金井家文書（1）は、目録の内の「幕

府支配・近代社会」から法令・行政として、文化12年の売り木訴訟についての文書などの法度・触書類として5点、明治期の布告・通達類を2点、明治期の戸長・地域行政に関するものを26点。寛政10年の急御用につき檜伐木願書をはじめ、万延年間の江戸城御本丸炎上についての冥加金上納に関する上納・献金の文書23点。その他に朱印地・山林関係が16点、社会・世相として8点。次に「社領」の中から宝永6年の御法度五ヶ条の証文並びに人別改帳など支配に関する文書23点、土地に関する文書2点、元禄4年の御嶽神領御年貢の覚えなど年貢・諸役に関する文書54点、鉄砲に関する文書21点、宝永6年の武州御嶽麓人別並びに奉社五人組帳などの戸口・身分に関する文書55点、講中へ廻村の為の通行手形願い書などの文書16点、その他に社地・山林管理に関する文書53点の304点が解読されています。

2005年3月には報告書(Ⅲ)として武州御嶽山文書第二巻 一金井家文書(2) (博物館にて2,500円で販売中)が刊行されました。第二巻は第一巻の続きとして目録の「社領」のなかから享保19年の長雨不作につき御救金願書などの治安・凶災に関するもの45点、道や橋普請などの作事に関する文書9点。次に「神社」の中から社歴・社格の文書20点、神主家督万事定目録など12点、造営・修復に関する文書が16点、鎧や太刀など宝物・什物に関する文書29点、神事・祭礼、神社運営に関する文書70点、散物、寄付・奉納や御開帳・開扉、富興業による神社の財政に関わる文書55点。合わせて256点の解読された文書が収録されています。

2009年3月に発行された報告書(Ⅳ)第三巻 一金井家文書(3) (近日販売開始予定)には、第二巻の続きである伐木・売木や収支全般にわたる神社の財政84点、安政2年の檀家廻り万覚帳などの講中・配札や代参・一般参詣・登山など信仰に関わる文書26点、神道裁許状などの免許状や家事・普請、諸事など御師家に関する文書134点の合わせて244点の文書が解読され収録されている。それぞれの末巻には詳しい解説が載っています。

御嶽村は山上と山下の小名である滝本・中野・集場戸(あずばど)・払沢などに分かれています。山上と滝本・中野が御朱印30石の地域で社領・神領と呼ばれており、集場戸・払沢は代官支配の幕府領であった為、勘定奉行・代官の管轄であるのに対して、社領は寺社奉行の管轄であるので、一村が二つの支配によって行われていました。三巻の資料を通して御嶽神社の格式や神木など幕府との関わり・神主と御師家・社僧世尊寺との関わりや山上・山下御師家と京都公家家との関わり、明治期になってからの御岳山への参詣の目的が信仰から観光や避暑地などとして訪れるようになってきたことの変化がみられます。

御岳山には国宝をはじめ国の重要文化財・重要美術品、檜や杉並木などの天然記念物・史跡・名勝を含めた都・市指定の多くの文化財があります。永い歴史の中で自然や文化を大切に守ってきた御嶽神社と社家の方々がいたからに他ならないと思います。

(文責 儘田 小夜子)